厚沢部町教育委員会発掘調査報告書　第12集

史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡

館 城 跡 X

ー令和５年度歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業に伴う発掘調査報告書ー

令和６年３月

北海道厚沢部町教育委員会

例言

1. 本書は令和 5 年度に実施した史跡松前城跡館城跡発掘調査報告書である。
2. 遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘 158 ほかである。
3. 本調査は文化庁「歴史活き活き！ 史跡等総合活用整備事業」による国庫補助を活用した成果の一部である。
4. 本書の編集は厚沢部町教育委員会事務局石井淳平が担当した。
5. 本書の文責者が編集担当以外の場合にはその氏名を文末に記載した。
6. 現場遺構図面は宮塚義人（調査員）が作成し、トレース等処理を行った。
7. 遺物の実測及びトレース、写真撮影は石井淳平が行った。
8. 出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
9. 本報告書にかかる発掘調査については「史跡松前氏城跡館城跡保存整備検討委員会」の指導を受けた。

   委 員 長　臼杵　勲（札幌学院大学人文学部教授）

   副委員長　田才雅彦 (文化財サポート)

   委　　員　久保　泰 (元松前城資料館館長)

   委　　員　千田嘉博 (名古屋市立大学高等教育院教授)

   委　　員　佐藤永吉 (前館観光促進会会長)

   委　　員　大萱昭芳（デザイン文化研究室）

   委　　員　小林和貴（東北大学, 学術資源研究公開センター学術研究員）

10. 指導・助言

    岩井浩介 (文化庁資源活用課)、内田和典 (北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課)、細畑幸治（館観光促進会会長）

11. 調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。

    小峰彩郷・宮原浩（江差町教育委員会）、佐藤雄生 (松前町教育委員会)、塚田直哉 (上ノ国町教育委員会)、野村拓一（函館市教育委員会）、藤田巧（乙部町教育委員会）、山田央（七飯町教育委員会）

12. 本報告書はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際 ライセンスの下に提供する。

目次

例言 ・・・ i
第1章 発掘調査の概要 ・・・ 1
1.1 調査要項 ・・・ 1
1.2 調査体制 ・・・ 1
1.3 調査にいたる経緯 ・・・ 1
1.3.1 館城築城と落城 ・・・ 1
1.3.2 道指定から国指定へ ・・・ 2
1.3.3 外郭線の確認調査と整備基本計画 ・・・ 2
1.3.4 整備計画改訂と各種探査 ・・・ 2
1.3.5 令和5年度発掘調査 ・・・ 2
1.4 調査の経過 ・・・ 6
1.4.1 調査準備等 ・・・ 6
1.4.2 現地調査 ・・・ 6
1.5 整理作業等 ・・・ 7
第2章 遺跡の位置と環境 ・・・ 9
2.1 地理的環境 ・・・ 9
2.2 地質的環境 ・・・ 9
2.3 館城の位置と周辺の地形 ・・・ 10
2.4 館城築城に至る歴史的経緯 ・・・ 12
2.4.1 13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任 ・・・ 12
2.4.2 正議隊のクーデター ・・・ 12
2.4.3 館城の築城 ・・・ 12
2.4.4 旧幕府軍の攻撃と館城の落城 ・・・ 13
2.5 館城関連遺跡 ・・・ 14
第3章 調査の方法 ・・・ 17
3.1 発掘調査基線 ・・・ 17
3.2 調査の方法 ・・・ 18
3.2.1 掘削 ・・・ 18
3.2.2 現地測量 ・・・ 18
3.2.3 整理作業 ・・・ 19
3.2.4 保管 ・・・ 20
3.3 基本層序 ・・・ 20
第4章 遺構と出土遺物 ・・・ 21
4.1 調査の概要 ・・・ 21
4.2 検出した遺構 ・・・ 25

4.2.1 概要 25
4.2.2 盛土層 29
4.2.3 建物 2 33
4.2.4 建物 3 35
4.2.5 溝跡 40
4.2.5.1 溝 01 40
4.2.5.2 溝 02 42
4.2.5.3 溝 03 44
4.2.6 井戸 01 45
4.2.7 施設 01 46
4.3 出土遺物 48
4.4 遺物出土状況 51
第 5 章 調査成果のまとめ 53
5.1 検出遺構 53
5.1.1 盛土層 53
5.1.2 建物跡と地業 53
5.1.3 建物 2 53
5.1.4 建物 3 53
5.1.5 上下 2 層の礎石 54
5.2 レーダー反応と地下遺構 54
5.2.1 増田家文書「館築城圖」との比較 55

図目次

1.1 平成 21 年度検出礎石（建物 3） 3
1.2 磁気探査（令和 3 年 8 月 11 日） 3
1.3 レーダー探査結果と令和 5 年度発掘調査区 3
1.4 過年度の調査と令和 5 年度発掘調査区 4
1.5 礎石配置及び令和 5 年の発掘調査区 5
1.6 GNSS による基準点設定 6
1.7 移植ゴテによる表土掘削 7
1.8 6 月 11 日開催遺跡見学会 7
1.9 写真測量のための UAV（6 月 16 日） 7
1.10 臼杵勲委員長による現地指導（6 月 18 日） 7
1.11 館城跡保存整備現状説明会（10 月 25 日） 8
2.1 厚沢部町の地形 9
2.2 厚沢部町の地質 10
2.3 館城の位置と周辺の地形 11
2.4 稲倉石古戦場（『鶉山道図鑑』） 13
2.5 昭和 48 年撮影旧稲倉石橋 13

2.6 館城関連遺跡 14
2.7 館城関連遺跡拡大図および大正 9 年旧版地形図 15
2.8 稲倉石古戦場（現在の鴉ダム） 16
2.9 ロクロ場（中央の小丘陵） 16
2.10 推定開墾役所跡 16
2.11 米揚岱 16
3.1 発掘調査の基準点 17
3.2 スコップによる表土掘削 18
3.3 移植ゴテによる表土掘削 18
3.4 移植ゴテによる盛土層上面の検出 18
3.5 中央トレンチの掘削 18
3.6 トータルステーションによる遺物取り上げ 19
3.7 ドローンを利用した写真測量 19
3.8 雨天を利用した注記作業 19
3.9 図化機による図化作業 19
3.10 基本層序（平成 17 年南側盛土西部断面）及び新旧層序対照 20
4.1 『館築城図』と発掘調査範囲 22
4.2 発掘調査前微細地形図 23
4.3 発掘調査前微細地形図（iPad LiDAR による計測図） 24
4.4 発掘調査前状況（北から） 24
4.5 遺構配置図 26
4.6 令和 5 年度発掘調査区オルソ画像 27
4.7 令和 5 年度発掘調査区全景（南から） 27
4.8 令和 5 年度発掘調査区 28
4.9 調査区中央トレンチ断面 30
4.10 調査区西壁断面 31
4.11 調査区東壁断面 32
4.12 067 検出状況（南から） 33
4.13 建物 2 34
4.14 建物 2 全景（南から） 35
4.15 建物 3 36
4.16 建物 3 全景（南から） 37
4.17 「3 尺地業」 38
4.18 「3 尺地業」断面（南から） 38
4.19 2 段重ねの礎石（028） 39
4.20 「2 尺地業」 39
4.21 「2 尺地業」断面（西から） 40
4.22 溝跡（溝 01-03）位置図 41
4.23 溝 01 42
4.24 溝 02 43

4.25 溝 02 断面（南から） ・・・ 43
4.26 溝 03 ・・・ 44
4.27 溝 03 断面（北から） ・・・ 45
4.28 井戸 01 ・・・ 46
4.29 井戸 01（西から） ・・・ 46
4.30 施設 01 ・・・ 47
4.31 施設 01 オルソ画像 ・・・ 47
4.32 出土遺物 1 ・・・ 49
4.33 出土遺物 2 ・・・ 50
4.34 遺物出土状況 ・・・ 51
5.1 上下 2 層の礎石 ・・・ 54
5.2 レーダー反応と地下遺構 ・・・ 55
5.3 増田家文書『館築城圖』と遺構配置 ・・・ 56

第 1 章　発掘調査の概要

1.1　調査要項

事業名　町内遺跡発掘調査事業
調査主体　厚沢部町教育委員会
調査地　北海道檜山郡厚沢部町字城丘 179-2、182-2、378
調査面積　217 ㎡
現地調査　令和 5 年 6 月 2 日～令和 5 年 7 月 4 日
整理作業　令和 5 年 7 月 6 日～令和 6 年 3 月 31 日

1.2　調査体制

教育長	鈴木　聡（～令和 5 年 10 月 9 日）
	髙野政人（令和 5 年 10 月 10 日～）
事務局長	安達達也（～令和 5 年 10 月 1 日）
	二宮和之（令和 5 年 10 月 2 日～）
主幹	二宮和之（～令和 5 年 10 月 1 日）
	石井淳平（令和 5 年 6 月 1 日～）
社会教育係長	板坂　勇（～令和 5 年 5 月 31 日）
社会教育係	富塚　龍（発掘担当者）
	大山かのこ
	岸田さとみ
発掘調査員	宮塚義人（発掘担当者）
発掘作業員	畑中　緑
	石渡　亮
	沼下友美

1.3　調査にいたる経緯

1.3.1　館城築城と落城

館城は明治元年 9 月に築城が開始され、同年 11 月 15 日に旧幕府軍の攻撃を受け落城した。落城後は長く放置され、大正末から昭和のはじめ頃に農地化され、このときに堀や土塁の大半が埋め戻しや敷き均しによって消滅したと考えられる。

1.3.2　道指定から国指定へ

昭和 30 年代後半から館城整備の機運が高まり、昭和 41 年 7 月 7 日付北海道教育委員会広報第 2945 号の告示（北海道教育委員会告示第 65 号）により道指定史跡となった。

厚沢部町では国指定をめざすため、昭和 63 年度から平成 2 年度にかけて内容確認調査を実施し、東側のほぼ全てと西側の一部の外郭線の所在を明らかにした。これらの調査成果にもとづき、平成 14 年 9 月に福山城跡に館城跡が追加指定され、名称が松前氏城跡福山城跡館城跡と変更された。

1.3.3　外郭線の確認調査と整備基本計画

史跡指定後、厚沢部町教育委員会では平成 19 年 3 月に『館城跡保存管理計画』を定め、今後の保存整備に関する基本的な方向性を示した。平成 19 年度には史跡指定地内の民有地 51,338.91 ㎡を公有化した。平成 17 年度から史跡整備に向けた内容確認調査を再開し、平成 24 年度までの 8 ヶ年の調査により、郭内には礎石建物 3 棟が良好に残存すること、西側の全部と北側の一部の堀・柵列の所在を確認した。

これらの調査成果に基づき史跡西側の追加指定にかかる意見具申を行い、平成 25 年 10 月 17 日付官報告示により 2,110.98 ㎡が追加指定された。これにより館城跡の史跡指定面積は 123,278.02 ㎡となった。

平成 25 年度に松前氏城跡館城跡整備検討委員会を設置し、平成 26 年 3 月に『館城跡保存整備基本構想』（厚沢部町教育委員会 2014）を策定した。さらに平成 27 年 3 月に『館城跡保存整備基本計画』（厚沢部町教育委員会 2015）を策定した。

1.3.4　整備計画改訂と各種探査

平成 29 年からデジタル技術を活用した史跡整備手法の検討を開始し、令和 2 年 3 月に館城跡保存整備検討委員会を設置した。令和 3 年度から文化庁「歴史活き活き！ 史跡等総合活用整備事業」による史跡整備事業に着手し、令和 3 年から 4 年に史跡内の水文調査、令和 3 年に植生調査を行った。また、令和元年及び令和 3 年に札幌学院大学臼杵勲教授によるレーダー探査や磁気探査が行われ（図 1.1・1.2）、館城御殿にかかる地下構造が明らかとなった（図 1.3）。以上の新たな知見やデジタル技術を活用した整備内容を加えるため、平成 27 年策定の基本計画を改訂することとした。

1.3.5　令和 5 年度発掘調査

基本計画改訂に伴い、御殿にかかる地下遺構の情報が必要となったことから、過年度調査や各種探査結果を踏まえ発掘調査を実施することとした。本調査は臼杵勲氏によるレーダー探査により、平成 21 年の地表面調査以来、2 棟に分割されると考えてきた礎石群（建物 2 及び建物 3）の間にレーダーの反応が見られたことから、この地下構造の実態を把握することを目的として実施した。そのため、建物 2 及び 3 とした 2 群の礎石群間に調査区を設定した（図 1.3・1.4・1.5）。

図 1.1　平成 21 年度検出礎石（建物 3）

図 1.2　磁気探査（令和 3 年 8 月 11 日）

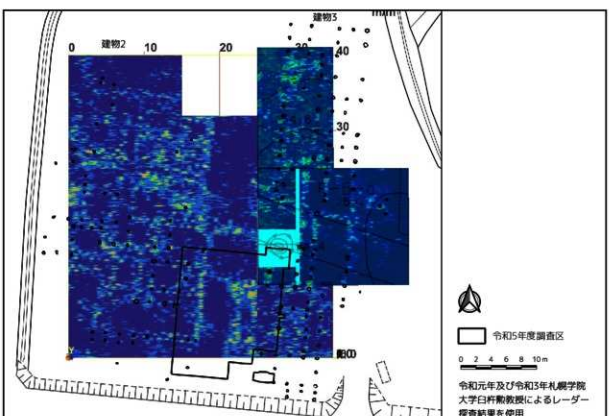


図 1.3　レーダー探査結果と令和 5 年度発掘調査区

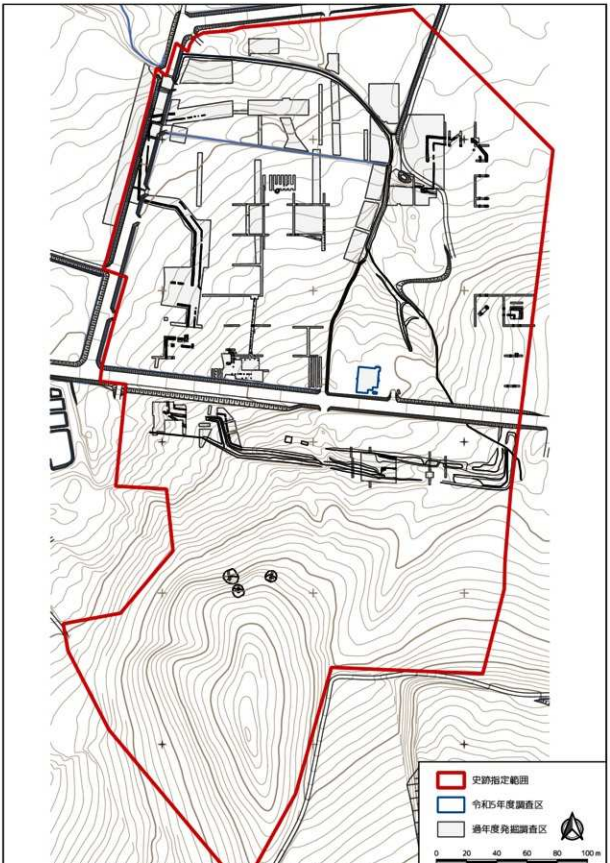


図 1.4　過年度の調査と令和 5 年度発掘調査区

図 1.5　礎石配置及び令和 5 年の発掘調査区

1.4　調査の経過

1.4.1　調査準備等

1 月 26 日　令和 5 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
2 月 16 日　史跡名勝天然記念物現状変更許可申請書提出
4 月 1 日　4 庁財第 5405 号により国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金交付決定
4 月 21 日　5 文庁第 51 号により現状変更許可
5 月 24 日　調査区設定及び基準点設定作業
5 月 31 日　調査員雇用開始

図 1.6　GNSS による基準点設定

1.4.2　現地調査

6 月 1 日　機材整理及び環境整備
6 月 2 日　作業員雇用開始・現地調査開始
6 月 5 日　表土掘削・盛土上面検出
6 月 8 日　ドローンによる空中写真撮影
6 月 11 日　館城跡まつりにあわせて現地説明会実施・検討委員現地指導
6 月 12 日　第 1 回館城跡保存整備検討委員会・現地指導の後、会議
6 月 16 日　表土掘削おおむね完了。午後ドローンによる空中写真撮影
6 月 18 日　臼杵委員長による現地指導
6 月 19 日　中央トレンチ掘削開始
6 月 20 日　中央トレンチ断面図化用写真撮影
6 月 21 日　東西トレンチ掘削開始。引き続き中央トレンチ掘削作業

6 月 22 日　西壁トレンチ掘削。江差町教育委員会小峰彩椰氏・斎藤侑花氏現場見学。午後からドローンによる空中写真撮影。
6 月 23 日　館観光促進会会員 4 名現場見学。久保委員現地指導。
6 月 26 日　井戸 01 南の地業検出。井戸 01 周辺遺物取り上げ。大萱委員現地指導。
6 月 27 日　井戸 01 南の地業断面撮影。並行して火山灰による埋め戻し開始。
6 月 28 日　田才委員現地指導。埋め戻し作業継続。仮設ハウスから機材撤収。
7 月 4 日　埋め戻し作業完了。全調査機材撤収。
7 月 5 日　現状変更終了報告書提出

図 1.7　移植ゴテによる表土掘削

図 1.8　6 月 11 日開催遺跡見学会

図 1.9　写真測量のための UAV（6 月 16 日）

図 1.10　臼杵勲委員長による現地指導（6 月 18 日）

1.5　整理作業等

7 月 6 日　遺物洗浄開始
7 月 11 日　西壁及び東壁断面図用オルソ画像作成
7 月 14 日　遺物洗浄終了
7 月 19 日　中央トレンチ断面図作成
7 月 22 日　断面図に土層注記

8 月 4 日　遺物注記終了
9 月 6 日　第 2 回検討委員会用建物復元図面作成
9 月 11 日　陶磁器接合作業開始
9 月 13 日　陶磁器接合作業終了
10 月 9 日　第 2 回館城跡保存整備検討委員会にて発掘調査成果報告及び基本計画改訂版審議
10 月 11 日　文化庁岩井調査官及び北海道教育庁文化財・博物館課内田主任現地指導
10 月 12 日　前日に引き続き現地指導。令和 6 年度調査計画及び基本計画改訂版について指導を受ける。
10 月 25 日　館城跡保存整備現状説明会（参加者 19 名）
11 月 22 日　金属製品クリーニング
11 月 24 日　陶磁器実測開始
11 月 28 日　宮塚調査員と遺構図版及び原稿打ち合わせ。教育委員会協議会にて令和 5 年度発掘調査成果及び今後の事業計画について説明
12 月 3 日　第 44 回南北海道考古学情報交換会にて令和 5 年度館城跡発掘調査成果報告
12 月 5 日　第 2 回厚沢部町社会教育委員の会議にて令和 5 年度発掘調査成果及び今後の事業計画について説明
12 月 6 日　第 2 回厚沢部町文化財保護委員会にて令和 5 年度発掘調査成果及び今後の事業計画について説明
2 月 19 日　第 3 回館城跡保存整備検討委員会にて発掘調査報告書内容等審議
2 月 20 日　第 3 回館城跡保存整備検討委員会にて基本計画改訂版等審議
3 月 31 日　発掘調査報告書刊行

図 1.11　館城跡保存整備現状説明会（10 月 25 日）

第 2 章　遺跡の位置と環境

2.1　地理的環境

厚沢部町は北海道の南端、渡島半島の日本海側、檜山管内に位置し、江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町の 7 市町と境界を接する。函館市から約 60km の距離に位置する。

町の総面積は 460.42 ㎢で、東西約 29km、南北約 27km の広がりをもつ。町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶉川の三河川の流域にまたがる（図 2.1）。町域の 80%を山林が占め、畑 5%、田及び原野がそれぞれ 4%を占める。住宅地は本町・新町・赤沼町、鶉町、館町に団地を形成する。

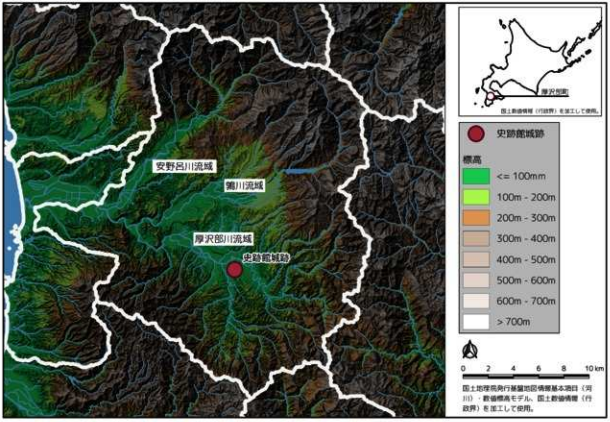


図 2.1　厚沢部町の地形

2.2　地質的環境

厚沢部町域の地質は、館地区を流れる厚沢部川本流域と、鶉川流域及び安野呂川流域とに大別できる。いずれの流域でも中流域では檜山層群に属する堆積岩が主体となるが、厚沢部川上流域では厚沢部層及び館層に属する堆積岩が主体となり、鶉川、安野呂川上流域では安野呂火山砕屑岩類に属する火成岩が主体

となる（図 2.2）。また、厚沢部川左岸の下流域には松前層群に属する古生層（付加コンプレックス）が分布する（工業技術院地質調査所 1975, 北海道開発庁 1970）。

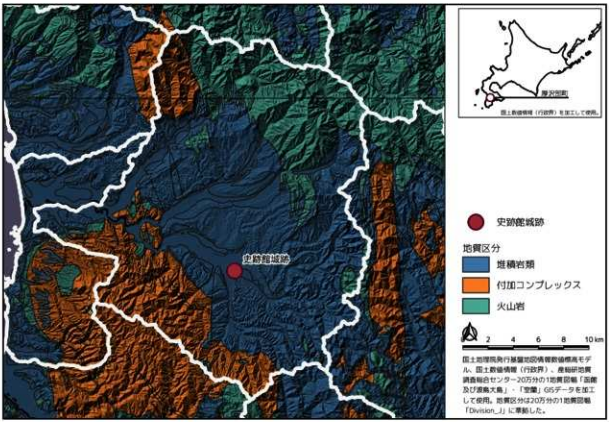


図 2.2　厚沢部町の地質

館城の所在する低位段丘面は後期更新世（約 7 万年前～1 万 8000 年前）の段丘堆積物、南側の山地は後期中新世-鮮新世（約 700 万年前～170 万年前）の堆積岩類（佐助沢部層）を基盤とする。館城の南東約 4km の佐助沢川では中新世のヒゲクジラ化石（アッサブクジラ）が産出する（地学団体研究会道南班 1989: p162）。

2.3　館城の位置と周辺の地形

館城は厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約 1km に位置する（図 2.3）。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約 50m で、糠野川に面した平坦面からの比高差は約 20m である。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約 30m の小丘陵[1]となっている。

1）　地域の住民に「丸山」と呼称されていることから本書でもこの名称を使用する。

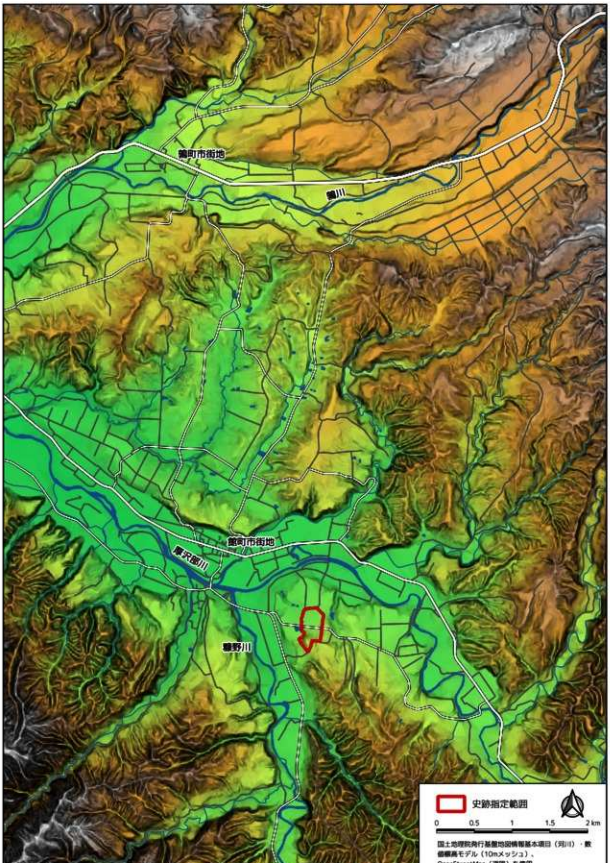


図 2.3　館城の位置と周辺の地形

2.4　館城築城に至る歴史的経緯

2.4.1　13 代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩 13 代藩主松前崇広は、慶応 2 年 4 月に病死する（『北門史綱』巻六　永田 1991）。崇広の死後、12 代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、藩政の中枢は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する反勘解由派の藩士達が、『建言書』（『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』　江差町史編集室 1979: pp. 463-465）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の蠣崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

2.4.2　正議隊のクーデター

明治元年（1868）7 月 28 日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』（江差町史編集室 1979: pp. 465-468）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか 4 名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという（『奉命日誌』江差町史編集室 1979: pp. 429-463）。

7 月 29 日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、8 月 1 日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室 1983: pp. 8-13）。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人団が反勘解由派の資金源となったとの見解がある（江差町史編集室 1983: p5）。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、8 月 1 日から勘解由派の粛清を開始した。一連の粛清は、9 月 24 日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

2.4.3　館城の築城

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝（平四郎）が残した日記（以下「築城日記」）によって、うかがい知ることができる（江差町史編集室 1981: pp. 1220-1301）。以下、築城日記により、館城築城工事の様子を示す。

9 月 2 日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。9 月 14 日には、大工 40 人・木挽 10 人が館へ向けて出立している。9 月 21 日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ下職 28 名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。また、9 月 12 日頃から土木作業が開始されており、9 月 23 日現在の延べ人工数は 1,525 人工に達している。9 月 28 日現在の館城築城にかかる人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭 5 人、木挽 2 人、平大工 92 人、下木挽 21 人、土方小頭 7 人、土方 243 人、人足 183 人となっている。

10 月 14 日には、建具師 3 人が木材とともに館へ向かっており、また、10 月 16 日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材料が館へ送られており、築城工事は内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10 月 24 日には、棟上げの儀式（「礎柱立御棟上御祝儀」）が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10 月 26 日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間内まで出張している。築城工事の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの 10 月 26 日をもって終わってお

り、この前後に、現地での作業もほぼ終了していたと考えられる。

2.4.4　旧幕府軍の攻撃と館城の落城

松岡隊の出陣　明治元年（1868）11 月 10 日、館城攻略のため松岡四郎次郎率いる幕府一連隊約 200 名が箱館五稜郭を出陣し、大野（現北斗市）を経て 12 日に鵡川上流の稲倉石に到達した。稲倉石には松前藩の防御陣地[2)]が設けられていた。

石井梅太郎の探索　攻撃に先立ち松岡隊は石井梅太郎に案内の地元民 2 名を伴につけ斥候を行わせた。石井は松前藩の守る稲倉石を無事通過するが木間内の陣屋前で詰問された際に懐中の短銃を取り落したため密偵であることが露見し、首をはねられた（『北洲新話』須藤 1996: pp. 135-136, 『南柯紀行』大鳥ほか 1998: pp. 75-76, 『蝦夷錦』須藤 1996: p207）。

稲倉石の戦い　11 月 12 日に稲倉石に到達した松岡隊はここを守る松前藩陣地への攻撃を開始した。松前藩は狭い谷筋の道に高さ 1 丈の柵を隙間なく並べて封鎖し（『説夢録』須藤 1996: p61, 『北洲新話』須藤 1996: p136）、これに数門の砲を備えていたが（『戦争御届出書　松前家　全』松前町史編集室 1974a: p324, （『蝦夷之夢』大鳥ほか 1998: p194 など）松岡隊は左右の岩山から攻撃を行いこれを突破した。

図 2.4　稲倉石古戦場（『鵡山道図鑑』）

図 2.5　昭和 48 年撮影旧稲倉石橋

館城前哨戦　翌 13 日、松岡隊は鵡村に宿陣する。14 日、松岡隊は全軍の約半分（2 小隊）を館村へ偵察に向かわせたところ、館城から出撃してきたと思われる松前藩軍と遭遇し、戦闘状態となった。松岡隊は「傍らの山」に兵を登らせ、ラッパを吹いて横合いから攻撃しようとしたところ、松前藩軍は館城へ撤退した（『麦叢録』大鳥ほか 1998: p238, 『戦争御届出書　松前家　全』松前町史編集室 1974a: p326）。

鵡村の戦い　この間、俄虫村（現厚沢部町字上里）から出撃した松前藩軍が、鵡村の松岡隊本陣に攻撃を加えた。松前藩は、稲倉石守備の責任者である今井興之丞が江差から残兵を率いて鵡川沿いに進軍し攻撃し、また、水牧梅干率いる部隊が上俄虫（現厚沢部町上里）から山越えして鵡村に向かったため「期せずして二方面の戦闘」（『報功心血』函館市中央図書館所蔵）となった。松岡隊は残る 2 小隊で防戦しこれを撃退した。この戦闘において松前藩は隊長水牧梅干が重傷（後死亡）を負い、戦死 2、重傷 2 を含む合計 7 名の死傷者を出している（『戦争御届出書 松前家 全』松前町史編集室 1974a: p325）。

館城の戦い　15 日、松岡隊は 3 小隊で館城攻撃を開始した（『蝦夷錦』須藤 1996: p208）。松前藩の兵力は、正面に今井興之丞率いる 20 名に砲 2 門、搦手に竹田泰三郎率いる 14 名、丸山の伏兵に富永善五郎率

2）　松前藩の防御陣地は現在の鵡ダム付近に設けられており、「三十間計りの切所に柵を構へ、野戦砲二門（米利堅ボート）と臼砲二口（十二挧）を据て之を守る」とある（『説夢録』 須藤 1996: p61）。松前藩側の記録では『館城築城日誌』に 10 月 27 日に「三上超順外拾壱人」や「今井興之丞様御人数」が木間内番所まで出張したことが記されており、この時期に松前藩は稲倉石の陣地を構築し、兵力の配備を行っていたことがわかる（江差町史編集室 1981: p1301）。

いる 10 名、松井屯・三上超順率いる予備 14 名、合計 58 名とされる（『戦争御届出書 松前家 全』松前町史編集室 1974a: p326）。松前藩の抵抗により戦闘は膠着状態となったが、差図役伊奈誠一、越智一朔らが城内に潜入し門を開けたため、松岡隊は城内に侵入した（『蝦夷之夢』大島ほか 1998: p195, 『麦叢録』大島ほか 1998: p239）

館城内での戦闘では三上超順らの奮戦が知られるが、城内に侵入され形勢不利となった松前藩兵の多くは脱出し、松岡隊は館城を占領した。松前藩側の記録では 11 名の戦死者を出したとされ（『戦争御届出書 松前家 全』松前町史編集室 1974a: p326）、旧幕府軍側の記録でも 10～20 数名を討ち取ったとされる（『蝦夷之夢』，『北洲新話』など）。

松前藩軍を破った松岡隊は、兵力不足のため館城を守備できないと判断し、火を放って鴉村に帰陣したという（『蝦夷錦』須藤 1996: p208）。

2.5　館城関連遺跡

館城及び箱館戦争関連遺跡として、1. 官軍の沢、2. 稲倉石古戦場、3. 鴉村古戦場、4. 丸山古戦場、5. ロクロ場、6. 開墾役所跡、7. 米揚岱などがある。（図 2.6）。ロクロ場や米揚岱は昭和 35 年の厚沢部村字名改正以前は字名として存在しており、大正 9 年発行の 5 万分 1 地形図「館」にも「上轆轤場」、「下轆轤場」、「米揚岱」の地名がみえる（図 2.7）。上下の轆轤場は現在の館町市街地から新栄にかけての範囲、米揚岱は館城東側の台地一帯で、いずれも広範囲に広がる旧字名である。

図 2.6　館城関連遺跡

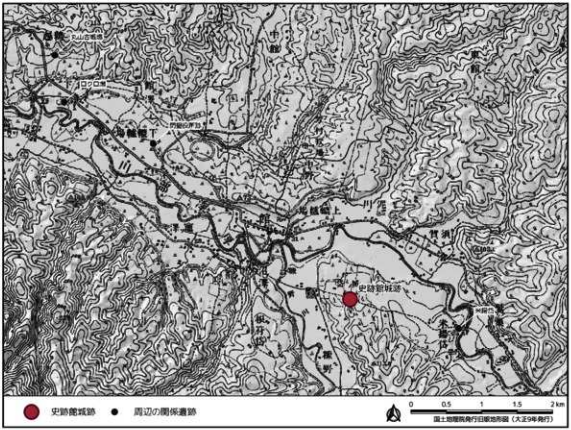


図 2.7　館城関連遺跡拡大図および大正 9 年旧版地形図

官軍の沢　安野呂川支流濁川の枝沢で、八雲町との町界付近に位置する。明治 2 年（1869）4 月 15 日から備前藩を中心に安野呂口の攻略部隊が編成されていたが、これに福山藩 1 中隊、松前藩 2 小隊が合流して、4 月 21 日頃から道路開通作業を開始した（大山 1968: p750）。部隊は 5 月 4 日に八雲町落部へ進出した。この間の作業内容は不明な点が多い。付近には、箱館戦争関連の地名として、「内藤の沢」、「官軍道路」などが残る。

稲倉石古戦場　明治元年（1868）11 月 12 日旧幕府軍一聯隊約 200 名と松前藩軍の戦闘が行われた古戦場。現在は 2001 年に竣工した鵡ダムの築堤の直下となっている。大正 8 年（1919）に旧松前藩士の蠣崎知次郎らが戦没藩士を弔うために「碧血碑」を建立した。鵡ダムの完成に伴い、碧血碑は国道 227 号の駐車場に移設された。

鵡村古戦場　明治元年（1868）11 月 12 日に稲倉石の松前藩陣地を攻略した旧幕府軍は、本間内を経て翌 13 日、鵡村（現字鵡）へ進み、ここで 2 泊している。14 日には、館城の偵察に出た一隊と館城守備隊の間で小戦闘が行われ、また、鵡村の旧幕府軍本隊を松前藩軍が急襲するなどの小競り合いが行われている。

丸山古戦場　11 月 14 日、鵡村から出撃した旧幕府軍偵察隊と館城守備隊との小戦闘が行われた。旧清和小学校南東の緩斜面で、現在は、農地造成による削平を受けている。

ロクロ場　館町市街から新栄にかけての地域で、川舟で運搬した開墾役所への資材をロクロ（滑車）で陸揚げした箇所と伝えられているものである（厚沢部町史編集委員会 1981b: pp. 64-66）

開墾役所跡　厚沢部川右岸の段丘面に位置する。安政年間に松前藩が設置したとされ、「高さ四尺の土盛りの垣を廻した六、七十間四方の広さをもつ構内に建てられて」おり、「四カ所の出入り口の門」を設け、「構内にある中央の大きな建物は米倉で、その東側の建物は御役所庁舎であって、五間に十間くらいの規

模であった」（厚沢部町史編集委員会 1981a: p84）とされる。昭和 42 年から開始された開発パイロット事業により地表面の遺構は消失し、地下の遺構も大きな損傷を受けたと考えられる（厚沢部町史編集委員会 1981a: pp. 85-86）。コンブラ瓶などの陶磁器が出土している。

米揚岱　館城東の厚沢部川左岸で館城に兵糧米を陸揚げした箇所と伝えられる。大正 9 年発行地形図（図 2.7）からは、館城内を通る道路がここで厚沢部川を渡渉し対岸へ通じていたことがわかる。

図 2.8　稲倉石古戦場（現在の鵜ダム）

図 2.9　ロクロ場（中央の小丘陵）

図 2.10　推定開墾役所跡

図 2.11　米揚岱

引用・参考文献

厚沢部町史編集委員会 1981a『桜島―厚沢部町の歩み―』第 2 巻, 厚沢部町

厚沢部町史編集委員会 1981b『桜島は語る―厚沢部町小史―』

江差町史編集室 1979『江差町史』第三巻史料三, 江差町

江差町史編集室 1981『江差町史』第四巻資料四, 江差町

江差町史編集室 1983『江差町史』第六巻通説二, 江差町

大鳥圭介・今井信郎 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社

大山柏 1968『戊辰役戦史』下, 時事通信社

工業技術院地質調査所 1975『地域地質研究報告 館地域の地質』

須藤隆仙 1996『箱館戦争資料集』新人物往来社

地学団体研究会 1989『地質あんない　道南の自然を歩く』北海道大学図書刊行会

永田富智 1991「北門史綱 (前承-巻之四より巻之七)」『松前藩と松前-松前町史研究紀要-』34 号, 松前町史編集室

松前町史編集室 1974a『松前町史』資料編第一巻

松前町史編集室 1974b『松前町史』通説編第一巻下

第 3 章　調査の方法

3.1　発掘調査基線

発掘調査基線は調査区内に打設した 4 級基準点を利用した（図 3.1・表 3.1）。世界測地系平面直角座標系 11 系に準拠した標識杭を 5m 間隔で調査区内に打設し、これを写真測量や SfM/MVS の幾何補正用標定として利用した。これに伴い過年度調査において利用していた日本測地系平面直角座標系準拠の 20m グリッドは廃止した。

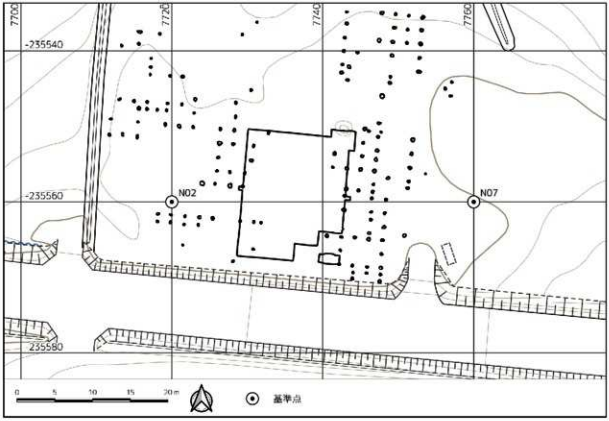


図 3.1　発掘調査の基準点

表 3.1　令和 5 年度発掘調査基準点

Name	X	Y	Z
N02	-235560	7720	54.901
N07	-235560	7760	55.128

3.2　調査の方法

3.2.1　掘削

掘削はすべて人力で行った。表土掘削にはスコップ・ジョレンを用い、遺物密度の高い場所では、部分的に移植ごて等を使用した。トレンチの掘削や遺構掘削は移植ゴテを標準とし、場合によってジョレンを併用した。

図 3.2　スコップによる表土掘削

図 3.3　移植ゴテによる表土掘削

草の根混じりの表土層除去後、地表面に礫層と黄褐色ローム層が検出されたため、それより下層への掘削を停止し、検出面の清掃にとどめた。

表土除去後に確認した礫層及び黄褐色ローム層は館城築城に伴う人為堆積層（盛土層）と判断し、この構造を確認する目的で調査区東西壁と調査区中央の東西方向に幅 50cm のトレンチを掘削し盛土層の底面まで約 30cm 掘り下げた。

図 3.4　移植ゴテによる盛土層上面の検出

図 3.5　中央トレンチの掘削

3.2.2　現地測量

遺構平面図及び断面図　写真測量によって行い、部分的に SfM/MVS を併用し、三次元メッシュデータやオルソ画像を作成した。写真測量はドローンによる低高度の航空写真を使用し、Stereo Metric Pro

（ver.8.0.1）により図化した。SfM/MVS は Metashape（ver.2.01）を使用してメッシュデータを生成し、これを CloudCompare によってオルソ画像及び DEM データ（GeoTIFF）を出力した。

遺物出土位置記録　光波式トランシット（SOKKIA iM-107F）を使用した。取得データは csv 形式で出力し、表計算ソフト及び GIS ソフトで編集した。

写真記録　調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Nikon7100 及び CANON EOS5D Mark Ⅱで、遺物撮影は NikonD7100 のみを使用し、照明には LED ライトを使用した。

図 3.6　トータルステーションによる遺物取り上げ

図 3.7　ドローンを利用した写真測量

3.2.3　整理作業

1 次整理　出土遺物は、調査中に約 270 点の水洗及び注記を行い、調査終了後に残りの約 250 点の水洗・注記、一覧表作成等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名（TJ）と調査年（23）、取上げ No を記載し「TJ23-●●」のように注記した。白色又は黒色のポスターカラーを用い、その上にラッカーを塗布して保護した。

2 次整理　図化機から出力したオルソ画像をもとに遺構平面図および断面図を作成した。地形図及び遺構図の作図・編集には、オープンソースの地理情報システム QGIS(ver3.2.8) を利用し、遺物の編集と集計、グラフ作成にはオープンソースの統計解析環境 R(ver4.3.1) を利用した。

図 3.8　雨天を利用した注記作業

図 3.9　図化機による図化作業

遺物実測は、断面図及び平面の輪郭図を手書き実測し、素図をスキャナーで読み込み Inkscape(ver.1.0.2) でトレースした。染付の文様は写真画像のほか、SfM/MVS によって作成した 3 次元データからオルソ画像を編集し、補正、貼付した。

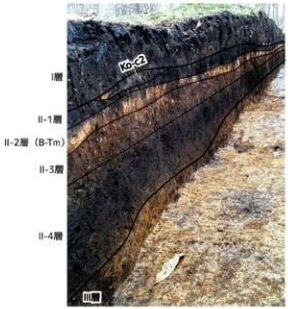
3.2.4　保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。現地測量図面類のうち、光波式トランシットにより取得したデータは csv 形式で保存した。SfM/MVS による三次元データは元画像（JPG 形式）及び OBJ 形式データを保存した。手書きの図面類は紙媒体で図面ケースに格納した。

発掘調査で得られた全ての図面・台帳・電子データは厚沢部町教育委員会で保管する。

3.3　基本層序

基本層序の分類は、『館城跡　遺構確認調査報告書』（厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989 年）のそれ（以下旧層序）を改変して使用した。なお、基本層序の土色、土質は、平成 17 年調査の南側盛土西部（第 1 調査区）における断面観察の結果を基準とした（厚沢部町教育委員会 2007: p21）。



旧層序	基本層序
I	I
II	II-1
III	II-2
IV	II-3
V	II-4
VI	III
VII	

図 3.10　基本層序（平成 17 年南側盛土西部断面）及び新旧層序対照

I 層　表土・耕作土　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　草の根の混じる地表面下約 10cm の自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序 I 層に相当。

II-1 層　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅 旧層序II層に相当。

II-2 層　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂壌土　粘性弱　堅密度軟 白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）と考えられる砂質の堆積層で約 5cm の層厚である。旧層序III層に相当。

II-3 層　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅 土性はII-1 層に似る。旧層序IV層に相当。

II-4 層　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅 土性、土色ともにII-1 層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るく感じる。旧層序 V 層に相当。

III層　褐色（10YR4/6）埴壌土　粘性中　堅密度堅　旧層序VI・VII層に相当

第 4 章　遺構と出土遺物

4.1　調査の概要

館城御殿周辺の遺構の確認に当たって、増田家文書「館築城圖」（以下「築城圖」）では、連結した建物と記載されているが、残存する礎石の配置や地中レーダー探査の結果、建物が東西 2 棟に分かれるのではないかと考えられたので、「築城圖」の連結部分に当たる部分を中心に発掘区を設定した（図 4.1）。発掘区の主軸は、残存する礎石列を参考に、真北から約 5° 東偏させた。

草刈りを終えた時点で、発掘予定地を含め北側にも平坦面が看取されたので、ドローンによる空中写真撮影を行い、ステレオモデルから周辺地形の微細写真測量を行った。これに平成 21 年に行った礎石確認調査の結果を重ねたものが図 4.2 である。また iPad による LiDAR 計測を行い調査前の微細地形を把握した（図 4.3）。

御殿周辺は、町道より北側で明瞭に 2 段の平坦面が看取でき、礎石の配列から町道北側の平坦面上に 2 棟の建物、北側の一段低い平坦面に 1 か所の建物礎石が載るようであり、建物は盛土上に建てられている可能性が高いと判断された。

町道北側の建物の間は谷状の地形となっている（図 4.3・4.4）。西側の建物跡の北側に谷状のくぼみがみられ（図 4.2）、東側の建物跡にも続いているが、これは、現町道造成以前の道跡である。町道から史跡地内に入る入口の北側は削平されており、礎石の一部が抜き取られている可能性が高いが、この部分は調査されていないので、東側建物の東端を決めることは現段階では不可能である。また、北側平坦面も礎石の存在する部分は周辺より 1 段高くなっている。

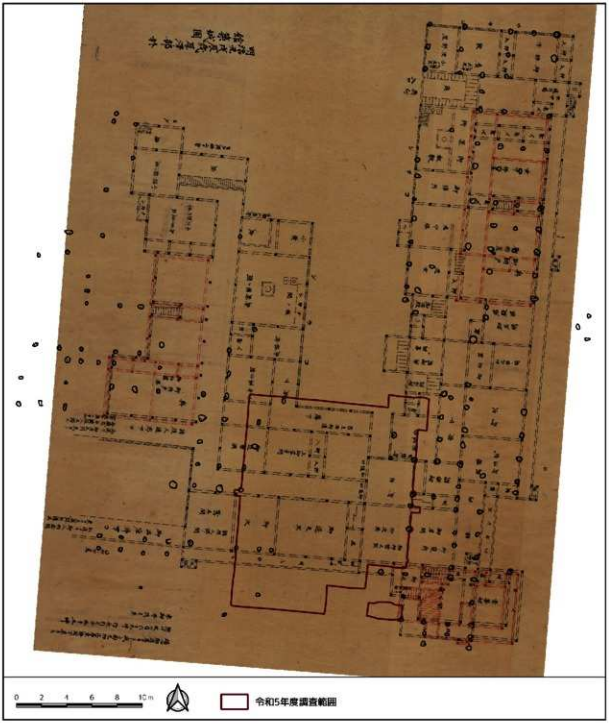


図 4.1　『館築城図』と発掘調査範囲

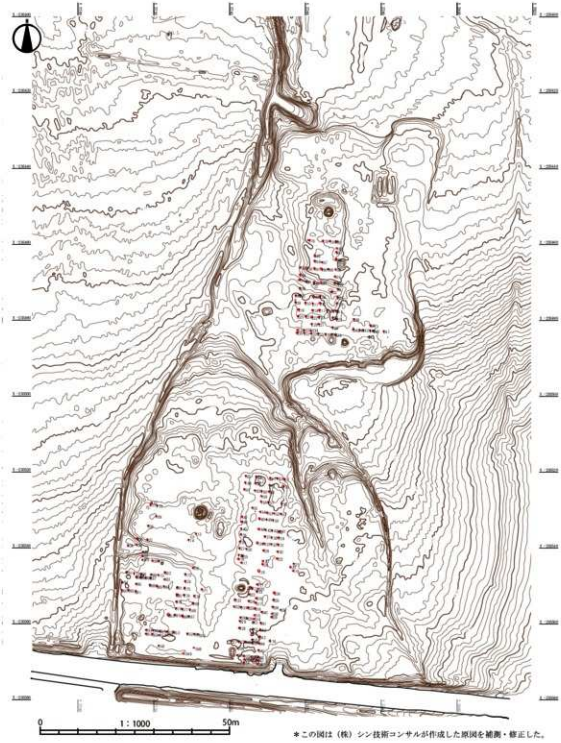


図 4.2　発掘調査前微細地形図

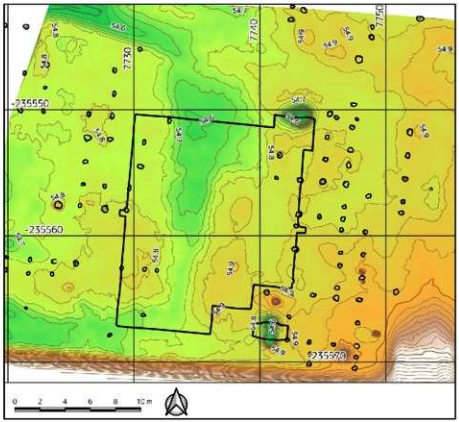


図 4.3　発掘調査前微細地形図（iPad LiDAR による計測図）

図 4.4　発掘調査前状況（北から）

4.2　検出した遺構

4.2.1　概要

令和 5 年度の発掘調査で検出した遺構は、建物跡 2、溝跡（溝 01-03 と表記）3、井戸跡（井戸 01 と表記）1、性格不明施設跡（施設 01 と表記）1 である（図 4.5・4.8）。建物跡の名称は、平成 21 年度の地表面調査での名称を使用した（厚沢部町教育委員会 2010）。井戸、施設については、今後の調査で追加付番が考えられるため 01 とした。

前節でも述べたが、令和 5 年度の調査の大きな目的は「築城圖」に記載された「連結した建物」の解明であることから、建物 2 と 3 を通すように東西方向に幅 50cm のトレンチを設定した（図 4.8・図 4.9）。トレンチ断面の観察では、建物建設以前の地表は北西に傾斜した緩斜面である。建物部分には盛土層がみられるが、地表面で溝状に窪んでいる部分には盛土層はみられなかった。

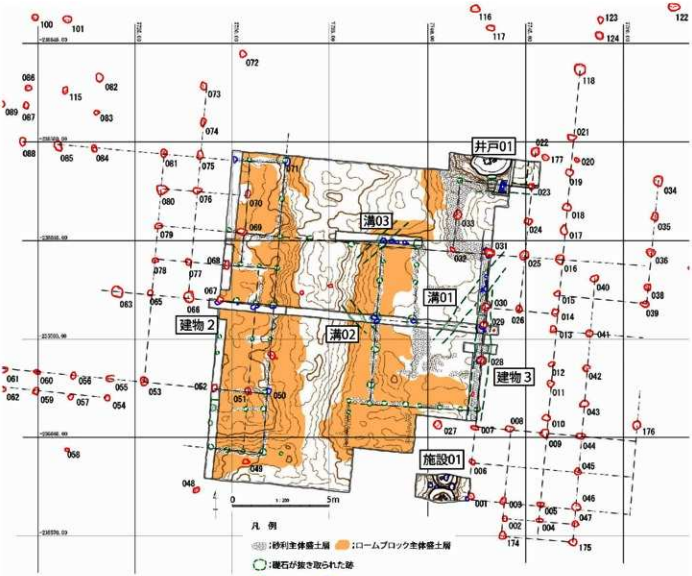

井戸01
溝03
溝01
溝02
建物 2
建物 3
施設01
凡 例
:移利主体盛土層
:ロームブロック主体盛土層
:礫石が抜き取られた跡
:上層の礫石
:下層の礫石

図 4.5　遺構配置図

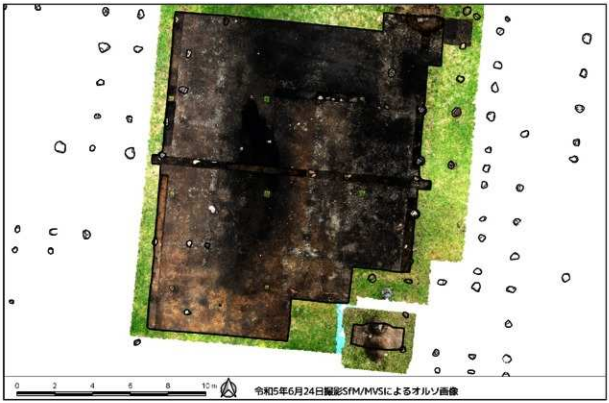


図 4.6　令和 5 年度発掘調査区オルソ画像

図 4.7　令和 5 年度発掘調査区全景（南から）

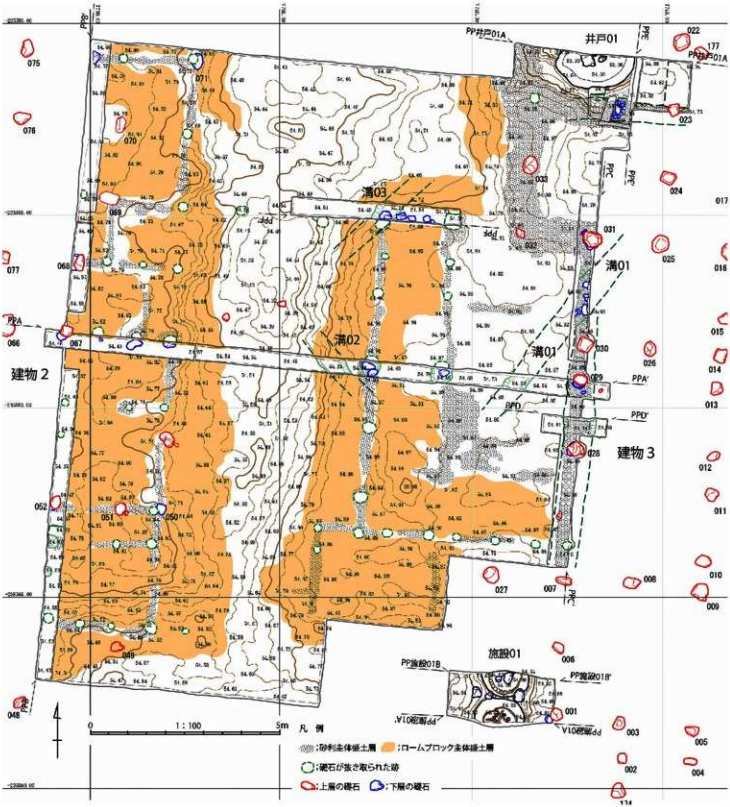


図 4.8　令和 5 年度発掘調査区

4.2.2　盛土層

調査前現況地表面は調査区中央が谷状の地形となっており、調査前地形測量によっても確認できる（図4.3）。表土掘削後、谷状地形を挟んで東西に平坦な高まりが確認できた（図 4.6・4.7）。調査区の東西壁及び中央に設定したトレンチにより断面確認を行ったところ厚さ約 20cm の盛土層が確認できた（図 4.9・4.10・4.11）。

図 4.9～4.11 の断面図で図示したように、下層はロームブロックを多く含む黄褐色土層（黄土色表示）、上層は礫を多く含む黒褐色土層（灰色表示）で構成され、上下層とも固く締まる。

中央トレンチ（図 4.9）の観察から、調査区中央の谷状地形は旧地表面と結論付けられ、東西に盛土がなされた結果、谷状の地形が形成されたものと判断できる。

図 4.9　調査区中央トレンチ断面

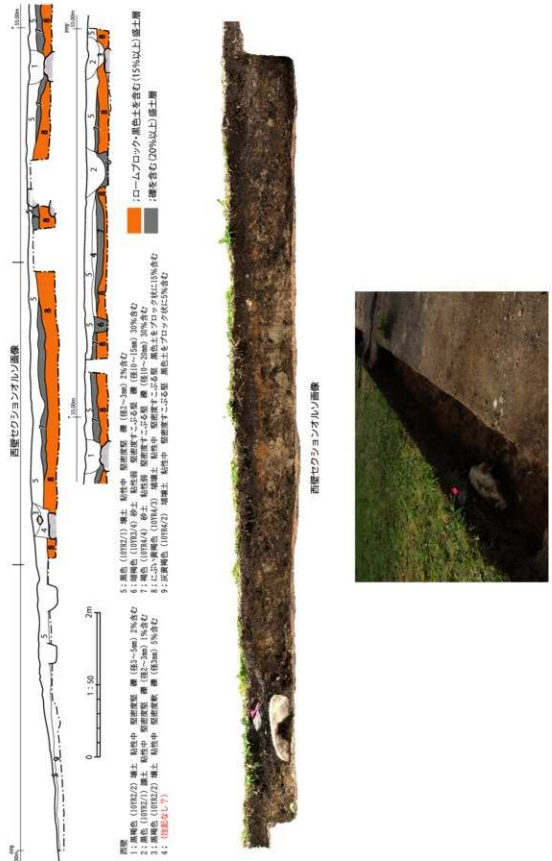


図 4.10　調査区西壁断面

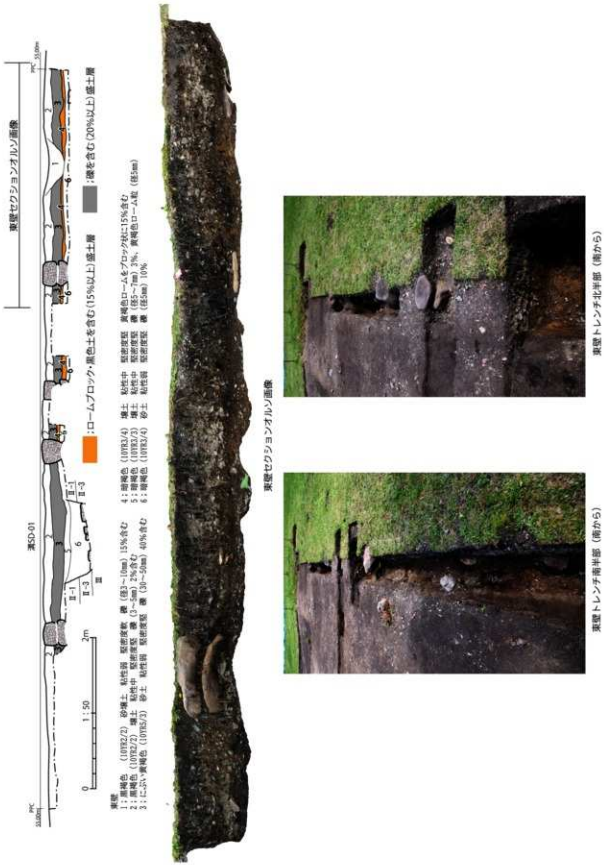


図 4.11　調査区東壁断面

4.2.3　建物 2

建物 2 は、令和 5 年度調査区の西側に位置する（図 4.13）。

すでに確認していた礎石 068、067、052 と、やや東にずれた 070、069 の配置を考慮して、南北に幅 50cm のトレンチを設定して調査を進めた。

4.2.2 盛土層の項で述べたように、ロームブロックを比較的多く含む（15%以上含む層を黄土色で示した）層と、礫を比較的多く含む（20%以上含む層を灰色で示した）層が上下に存在した。礎石間はロームブロックを多く含む層が途切れている箇所もある。礎石間の地業と思われる砂利層が確認されたが、2 段に積まれた礎石が確認された（A）。トレンチ底面からも礎石が確認された。下位に礎石があり、上位には礎石の抜かれた痕跡があるもの（B）と、抜かれた痕跡はあるが礎石はないもの（C）がみられる。

067 は、2 石が重なった状態で検出された典型的な例である（図 4.12）。上下の石の間隔は 15～25cm あり、ロームブロックを比較的多く含む 8 層で充填されていた。上下の石を固定する「飼石」的なものはみられなかった。

図 4.12　067 検出状況（南から）

下位の礎石はロームブロックを比較的多く含む盛土層が礎石間に充填され、その上部は礫を多く含む層に覆われる。想定される建物は、南北方向（7 間以上）×東西方向（2 間以上）の大型の建物である。東側には礎石列は検出できなかったが、ロームブロックを多く含む層が延びており、礎石列を取り囲むように分布する。

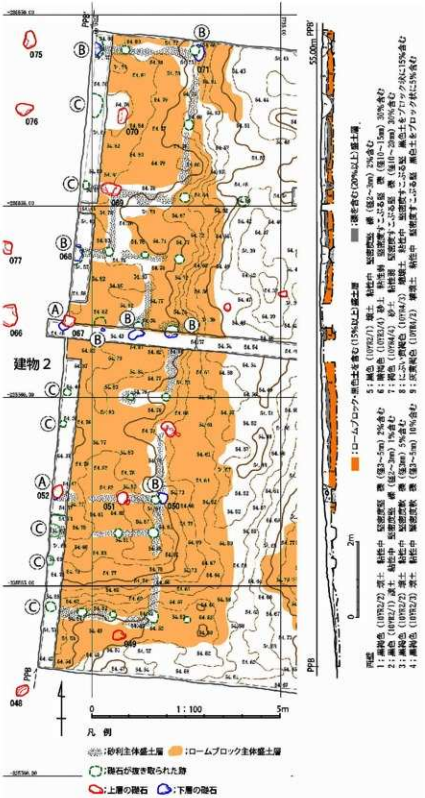

建物 2
凡 例
:砂利主体盛土層
:ロームブロック主体盛土層
:礫石が抜き取られた跡
:上層の礫石
:下層の礫石
1 : 100
0
5m
2m
55.00m
PP8
PP9
:ロームブロック黒色土を含む(15%以上)盛土層
:礫を含む(20%以上)盛土層

図 4.13　建物 2

図 4.14　建物 2 全景（南から）

4.2.4　建物 3

建物 3 は、令和 5 年度の調査区の東側に位置する（図 4.15・4.16）。

建物 2 同様、調査区東側の礎石列に沿って 1 本、中央セクションと呼称した東西方向のトレンチを設定し、建物の概況を把握した。東側の南北に設置したトレンチからは、4 基の 2 段重ねの礎石が検出された。トレンチ全体がほぼ地業の中にあり、建物 2 同様、下位にはロームブロックを多く含む層が、上位には礫を多く含む層が存在するが、北側はロームブロックを含む層が存在しない部分があった。また、ロームブロックを比較的に多く含む層が上述した東側の砂利列に沿って分布しており、北側は東に屈曲し、さらに 033 の礎石の西で北に延びる。

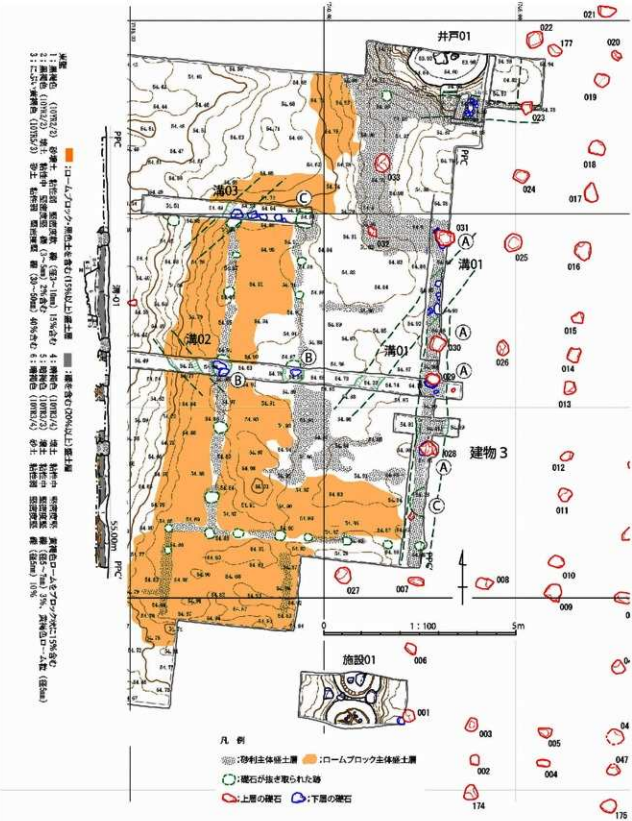

井戸01
溝03
溝02
溝01
溝01
建物 3
施設01
PPC
55.00m
1：100
5m
凡 例
:砂利主体版土層
:ロームブロック主体版土層
:礎石が抜き取られた跡
:上層の礎石
:下層の礎石

図 4.15　建物 3

図 4.16　建物 3 全景（南から）

このロームブロック層は南側では幅が広くなり、礎石列を取り囲むように東側に延びる。東壁沿いのトレンチから西に並行する 2 本の地業と思われる砂利層がみられ、礎石の抜き取り痕が確認できた。

地業の断面を観察するため中央トレンチの南側、礎石 028 と 029 の間にトレンチを設定した（図 4.17・4.18）。地業の底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がり、確認面で幅約 90cm を測る。「3 尺地業」と仮称した。下位はロームブロックを比較的多く含む層（4 層）と、間層を挟んで礫を比較的多く含む層（2 層）に分けられる。2 段重ねの礎石の断面を見ると、下位の礎石間に 4 層があり、上位の礎石間は 2 層で充填されているようにみえる。

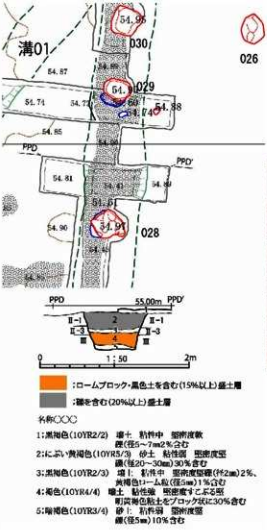


図 4.17　「3 尺地業」

図 4.18　「3 尺地業」断面（南から）

建物 3 では 2 段重ねの礎石（A）が 3 基確認された（図 4.19）。030 は大型の 1 石で、下位の層にまで達しており、周囲にはロームブロック層はみられず、地山層に掘り込みはみられなかった。この礎石（030）の北側の「3 尺地業」内では、ロームブロックを比較的多く含む層はみられなかった。礎石（030）と北側の礎石（031）間に、北東から南西に走る溝が検出され、溝 01 と付番した。中央トレンチからも溝 01 の延長と思われる溝が検出された。中央トレンチの東側で北西から南東に走る溝（溝 02）が、中央トレンチの北側に設置したトレンチから溝 01 に並行する溝が検出された。これらの溝跡については後述する。

図 4.19　2 段重ねの礎石（028）

溝 01 の覆土には、比較的大型の礫（径 15 ㎝前後）が溝を埋めるように下位に埋設されていた。中央トレンチの溝 01 では礫は確認されておらず、「3 尺地業」のある部分のみにみられる。

「3 尺地業」の北の端は 031 の礎石までで、そこから東へ延び、調査区外へ至る。礎石 031 から 032、033 に沿って砂利層が延びており、これらの砂利層に囲まれる範囲にはロームブロックや礫を多く含む層はみられない。地山層の黒色土（Ⅱ-1）層が露出し、多くの陶磁器が散乱していた。この砂利層は井戸 01 の南側に伸びており、さらに東側に延びるようである。井戸跡掘削後、トレンチを設定した（図 4.20）。2 段重ねの礎石が載る「3 尺地業」のラインの延長線上では、井戸の壁を損壊する恐れがあったので、やや東にずらせてトレンチを設定した。

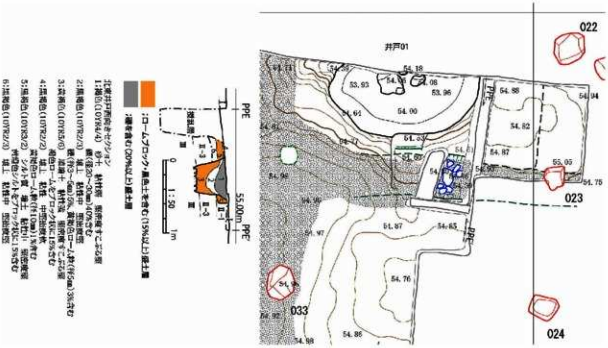


図 4.20　「2 尺地業」

トレンチでは幅約 60cm の地業の下位で小形の礫（径 7cm 前後）が敷き詰められたように出土した（図 4.21）。掘り込みは箱型で、底面は検出していないが、礫の上位にはロームブロックを比較的多く含む層（3 層）、さらに間層を挟んで礫を比較的多く含む層（1 層）がみられ、「3 尺地業」とよく似た断面が観察された。確認面での幅が約 60cm であることから「2 尺地業」と仮称する。この地業は調査区外東へ延びる。

図 4.21　「2 尺地業」断面（西から）

4.2.5　溝跡

調査区内から 3 本の溝跡を検出した（図 4.22）。それぞれについて記載する。

4.2.5.1　溝 01

030 と 031 の間で、北東から南西に延び、中央トレンチの部分で確認された溝跡と連結するものと思われる（図 4.23）。

上面（確認面）で幅約 50cm、発掘区東壁沿いでやや広く 65cm を測る。底面幅は約 30cm、東壁沿いでは 45cm とやや広い。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と、やや傾斜を持って立ち上がる部分がある。覆土には礫が充填され、ロームブロックを比較的多く含む層はみられない。

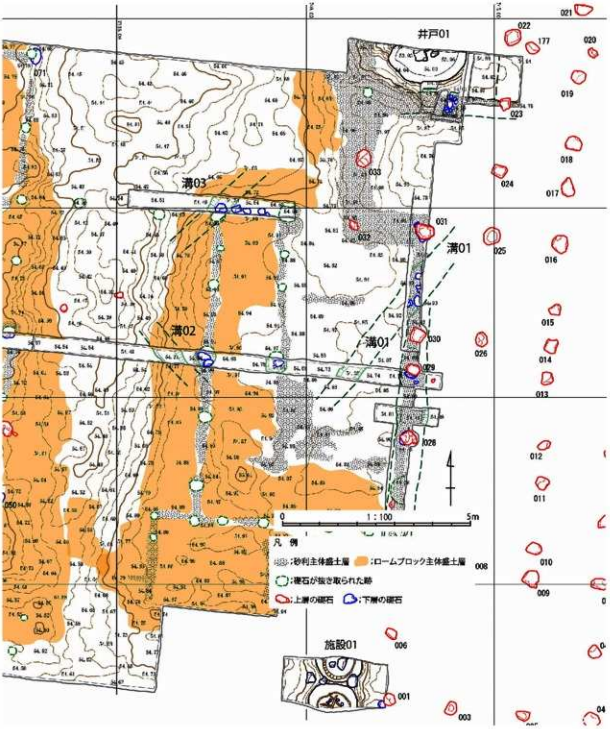


図 4.22　溝跡（溝 01-03）位置図

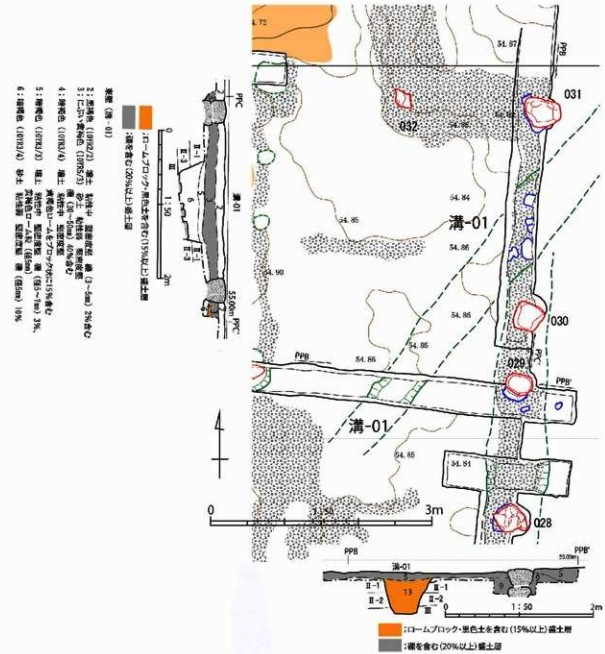


図 4.23　溝 01

4.2.5.2　溝 02

溝 02 は中央トレンチの溝 01 の西から検出された（図 4.24）。溝は北西から南東に伸びており、溝 01 とは軸が 90 度異なる。幅は溝 01 の中央トレンチ部分と類似する。覆土はロームブロックを 7%前後含む層である。溝は覆土堆積後、ロームブロックを比較的多く含む層（8 層）に覆われている（図 4.24・4.25）。

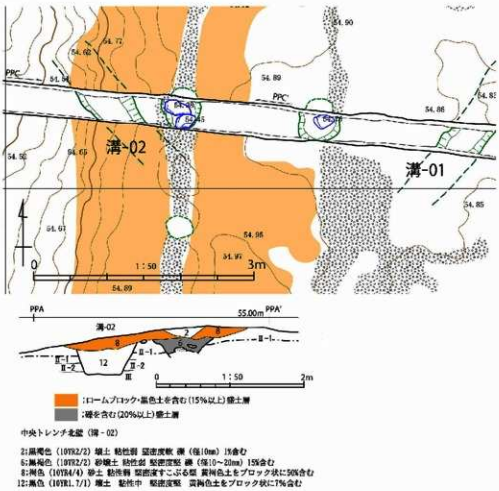


図 4.24　溝 02

図 4.25　溝 02 断面（南から）

4.2.5.3　溝 03

溝 03 は中央トレンチの北にこれと平行に設置したトレンチで検出した（図 4.26・4.27）。北東から南西に伸び、溝 01 と並行する。礎石が抜き取られた痕跡と重複する。砂利層は南北方向にはみられるが、東西方向にはみられない。抜き取り痕は下位の石まで達していない。溝が埋められた後、礫を比較的多く含む層（6 層）と、ロームブロックを比較的多く含む層（3、5 層）が溝の上部を被覆しており、盛土層の形成以前に埋め戻されたと思われる。

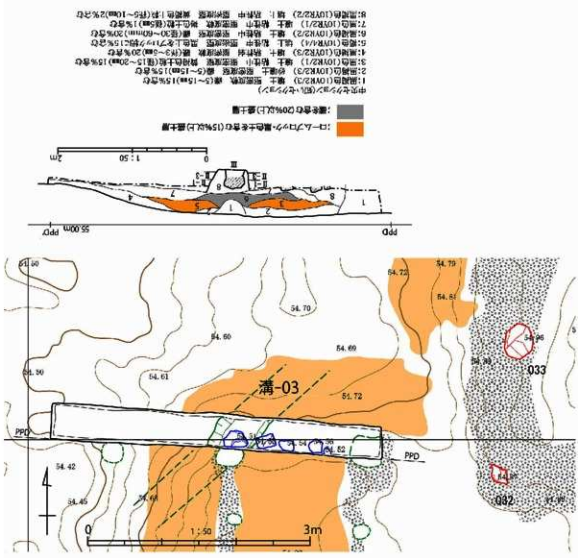


図 4.26　溝 03

図 4.27　溝 03 断面（北から）

4.2.6　井戸 01

令和 5 年度調査区の北西端に位置する（図 4.28・4.29）。

調査区北壁に沿って南側半分のみ発掘した。平面は不整円形で直径は約 1.5m である。

本遺構は近年大きく掘削された形跡があり、覆土からビニール袋やガラス瓶等、近現代の遺物が出土した。危険性を考慮して掘方底面までは掘削していない。井戸枠は掘削した範囲では検出できなかった。

南側に、「2 尺地業」が東西方向に検出された。地業を覆うと思われる砂利層が、井戸を囲むようにめぐっており、「2 尺地業」を伴う建物の存在が想定される。

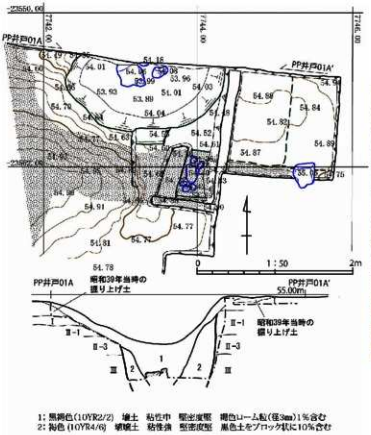


図 4.28　井戸 01

図 4.29　井戸 01（西から）

4.2.7　施設 01

令和 5 年度の発掘区の南東隅に位置する。当初は 2 基の井戸跡と考え、両方の中央部を通る断面を得るため、連結部に東西方向のトレンチを設けた（図 4.30・4.31）。掘削を進めると、覆土は軟弱で、ビニール袋やガラス片が出土し、2 個の樽が埋められた「便所」様の施設と考えられたが、地域住民の聞き込みでもそれらしい証言は得られなかったので、「施設 01」として記述する。「館築城圖」（図 4.1）にも、当該位置には構造物は記載されていない。

埋められている樽は上端が腐食している。北側の樽は上端で直径約 60 ㎝、南側の樽は直径約 85cm あり、南側のものがやや大きい。現存する樽の上端から 25-30cm まで掘削したところ、覆土中の礫が崩れる恐れが出てきたため調査を中止した。底面までは掘削していない。

覆土中からは近現代遺物のほか、礎石に用いられていたと考えられるやや大型の礫が出土した。南側のピットからは、先端が削られた幅 6cm 前後の「コマイ」状の木材が入れられていた。検出した 2 基のピットの間はブリッジ状に高まっており、中央部が低くなっている。落口状の肩部にはやや大型の扁平な礫が東西に置かれていた。図 4.30 平面図右下の礫が、平成 21 年確認の「001」番の石にあたる。

（宮塚義人）

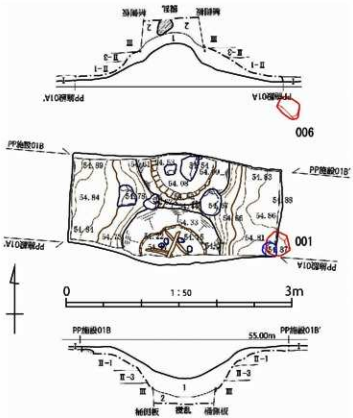


図 4.30　施設 01

図 4.31　施設 01 オルソ画像

4.3　出土遺物

出土遺物は 517 点で、うち近世は 410 点である（表 4.1）。このうち 51 点を図示した（図 4.32・4.33）。

1〜5 は磁器碗である。2 は外面松葉と花文、見込みに記号が施される。4 は口径 7.2cm の小型の碗で「花可惜」の文字。5 は筒型碗で高台に串歯、外面に唐草風の草文が描かれる。6 は胴部に隆起線のある碗で外面草花文、内面口縁部に雷文がめぐる。7〜14 は端反皿で、見込みの図柄は全て共通で、水辺の灌木と 2 羽の小鳥が描かれ、落款風のモチーフが描かれる。口径約 11cm で屈曲部の立ち上がりが強いもの（7〜9）と口径約 13cm で屈曲部の立ち上がりが緩いもの（10〜14）がある。15〜19 は段重である。15 は丸窓がめぐり、窓内に山水、花文が描かれる。16 は上段で丸窓内に青海波が描かれる。17 は段重蓋で丸窓内に文様が描かれる。18 は段重基段である。19 は外面に草花文が描かれる。20 は香炉で外面に花が描かれる。21〜29 は徳利である。21〜23 は頸部に蜻唐草文が描かれる。24 は胴部下位に矩形を基調とした連続文、胴部中位に草花が描かれる。25 は胴部下半が丸みを帯びるもので、胴部下位には矩形を基調とした連続文、胴部上位に草花が描かれる。26〜29 はいずれも底部のみ残存するもので、矩形を基調とした連続文が施される。30、31 は蓮華で花唐草が描かれる。32 は水滴で上面 2 箇所に印判風の文様が施される。33 は陶器碗で外面に草花文の一部がみられる。34 は陶器甕で内面に 3 条の沈線がめぐる。

35〜50 は鉄製品でいずれも釘である。

51 は寛永通宝でいわゆる「ハ貝寶」の新寛永である。裏面は背波となる。

表 4.1　出土遺物集計

時期	種別	端反皿	徳利	段重	香炉	その他	釘	計
近世	磁器	82	113	95	12	56	0	358
	陶器	0	0	0	0	11	0	11
	鉄製品	0	0	0	0	13	24	37
	木製品	0	0	0	0	1	0	1
	炭化物	0	0	0	0	2	0	2
	銅銭	0	0	0	0	1	0	1
計		82	113	95	12	84	24	410
近代	近代磁器	0	0	0	0	19	0	19
	近代陶器	0	0	0	0	2	0	2
	ガラス	0	0	0	0	64	0	64
	近代鉄製品	0	0	0	0	3	1	4
	その他	0	0	0	0	13	0	13
計		0	0	0	0	106	1	107
総計		82	113	95	12	190	25	517

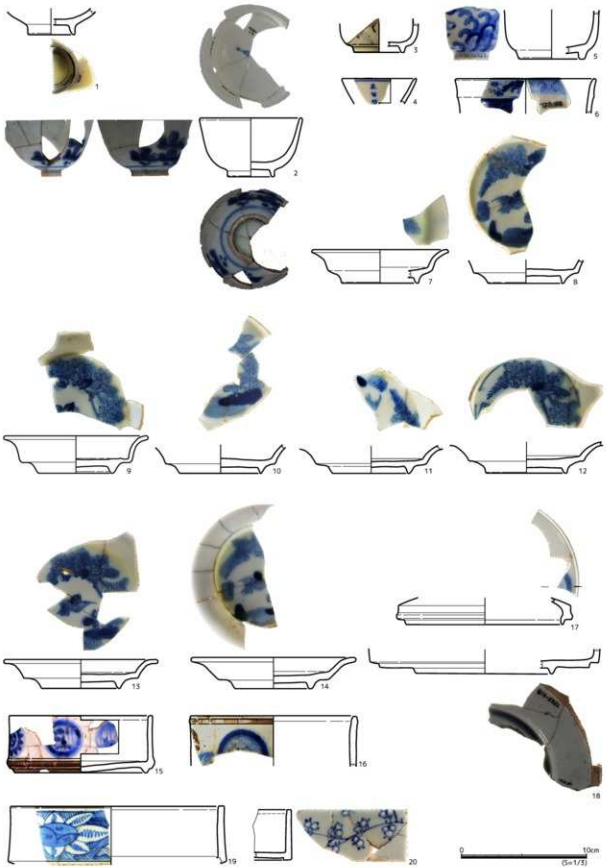


図 4.32　出土遺物 1

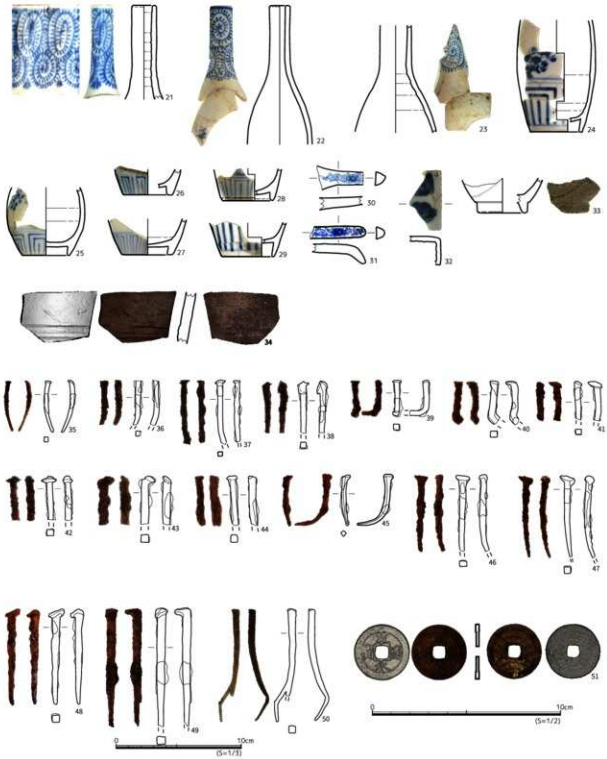

21
22
23
24
25
26
27
28
29
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
10cm
(S=1/3)
0
10cm
(S=1/2)

図 4.33　出土遺物 2

4.4　遺物出土状況

出土遺物の分布は調査区東側に偏る（図 4.34）。端反皿・徳利は調査区北東部の井戸 01 周辺に密集する。段重・香炉は調査区東側の建物 3 の西寄りに集中的に分布する。その他としたものの多くは陶磁器で器種分類できない小片や陶器の瓶、同じく小片のため器種不明の鉄製品がある。その他の遺物と釘は調査区東側建物 3 に付随する盛土の範囲を中心に分布し、特定の集中域は認められない。

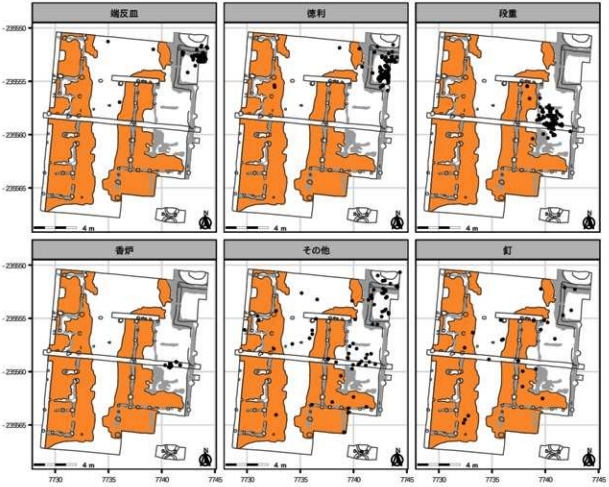


図 **4.34**　遺物出土状況

引用・参考文献

厚沢部町教育委員会 2010『館城跡 VI 平成 21 年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

第 5 章　調査成果のまとめ

5.1　検出遺構

5.1.1　盛土層

調査前現況地表面は調査区中央が谷状の地形となっており（図 4.3・4.4）、調査区の東西に厚さ約 20cm の盛土層が確認できた。（図 4.8・4.9・4.10・4.11）。調査区中央の谷状地形は旧地表面であり、東西に盛土がなされた結果谷状となったものである。盛土層はロームを主体としてつき固められており地表面付近には小礫が散布する。東西建物の建設に際して盛土による平坦地の造成が行われたことが明らかとなった。

5.1.2　建物跡と地業

発掘調査の結果、検出された礎石は地業の中に設置されていることがわかった。地業は「3 尺地業」と仮称した幅約 90cm の地業（図 4.17）と「2 尺地業」と仮称した幅約 60cm の地業（図 4.20）を検出した。すべての地業を立ち割って調査したわけではないが、「3 尺地業」は令和 5 年度の調査では東側の建物にのみ見られた。「3 尺地業」の範囲は推定 5 間×（3 間）である。建物 3 の東側を調査していないので東西方向の大きさは明らかではないが、残存する礎石列等を考慮し、上記の規模を推定した。

（宮塚義人）

5.1.3　建物 2

建物 2 は、令和 5 年度の調査区の北西側に広がると考えられる。令和 5 年度の調査区内では、建物跡同様、東・南側に「エン」状の礎石配列が検出された。発掘区域内では、南北方向に 7 間以上の建物跡が想定される。

建物基礎は、下位に黄褐色ロームブロックを主体とする盛土層の上に、礫を比較的多く含む層で盛土されており、盛土の範囲は、建物 3 同様、礎石列の周囲に広がっており、建物 3 の中央部のような黄褐色ロームブロックを主体とする盛土層がなく、礫混じり層はみられなかったので、建物中央部は調査区外に存在すると考えられる。

（宮塚義人）

5.1.4　建物 3

建物 3 は推定 5 間×（3 間）の「3 尺地業」を中心に、周囲に「2 尺地業」がめぐっていたと想定される。「築城圖」にある、2 階建て部分が「3 尺地業」のめぐる範囲と考えられ、「2 尺地業」の部分は平屋建てと考えられる。

黄褐色ロームブロックを主体とする盛土層は、図 4.15 に示したように、建物西側の「2 尺地業」の礎石列を囲むようにめぐっており、また、西側には半間の「エン」状の施設があったと想定される。南側には、半間よりやや狭い「エン」状の施設が想定される。また、黄褐色ロームブロックを主体とする盛土層は、

建物の北西側では東に屈曲したのち北に向かって延びており（図 4.15）、この部分には礎石・地業は検出できなかった。井戸 01 を覆うような地業跡は井戸の南側で検出されているので、井戸の部分は屋根があったと想定される。上記の谷状の低地から続く低地部分は中庭的な存在で、屋根はなかったと想定される。

（宮塚義人）

5.1.5　上下 2 層の礎石

盛土層直下の旧地表面で礎石を検出した（図 5.1）。これらの直上にはいずれも礎石や礎石の抜き取り痕が確認されており、旧地表面に礎石を据えた後、何らかの事情で整地が必要な事態が生じたため、設置した礎石を抜き取ることなく整地した上で新たな礎石を設置した可能性が考えられる。

上下に重なった礎石は、下位の礎石間がロームブロックを比較的多く含む層で、上位のそれは礫を比較的多く含む層で充填されていた。また、上下の石の間に「飼石」的なものは存在せず、礫を多く含む層で調整されている。このことから、礎石の設置が何らかの理由で 2 回に分けて行われたと考えられる。

（宮塚義人）

盛土層を挟んで設置された礎石　　盛土層下旧地表上面検出の礎石　　上下2段が接している礎石

図 5.1　上下 2 層の礎石

5.2　レーダー反応と地下遺構

令和元年及び 3 年に行われたレーダー探査での反応は、地業の配置とよく一致する（図 5.2）。したがって、レーダー探査の反応は高い確度で建物の規模や構造を捉えており、建物規模・構造の推定に資すると評価できる。次年度予定の調査ではレーダー探査の結果を活かしながら調査計画を立案することが可能である。

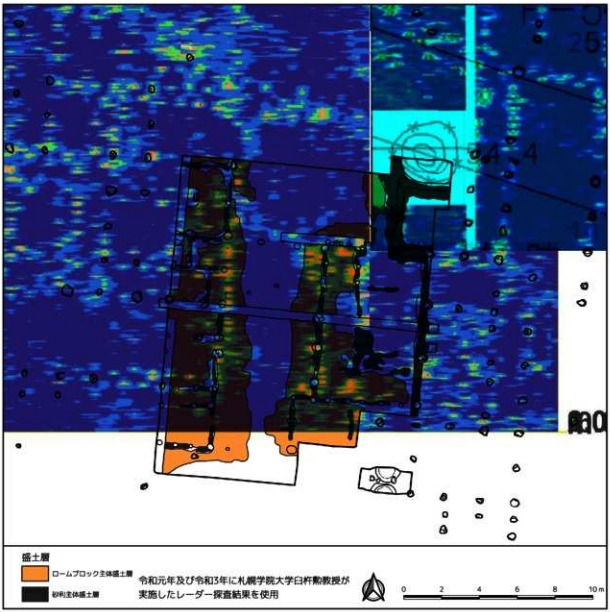


図 5.2　レーダー反応と地下遺構

5.2.1　増田家文書「館築城圖」との比較

増田家文書「館築城圖」は館城御殿の設計図と考えられている。平成 21 年の地表面調査の結果、東側の礎石群については築城圖と一致点が多いものの、西側の礎石群では一致箇所を見出すことは困難である。また、1 棟の建物として描かれる「築城圖」に対して現地の礎石配置は東西の 2 群に分かれることから、現地の礎石配置と整合しない可能性が高いと考えた（厚沢部町教育委員会 2010: p69）。

今年度の調査の結果、東西の礎石群は盛土層によって明瞭に 2 分され、東西の礎石群は最短距離で 3 間（5.4m）離れることが確認された（図 5.3）。「築城圖」では、この空間に「御逢之間」や「御台子之間」など、藩主の日中の居所や中級以上の藩士が詰める部屋が描かれている（図 4.1）ことから、この空間は館城の中枢ともいえる空間であり、整地や地業、礎石の設置がされていないことは考えられない。以上のことから、築城圖に描かれた 1 棟の建物は成立し難いと判断する。

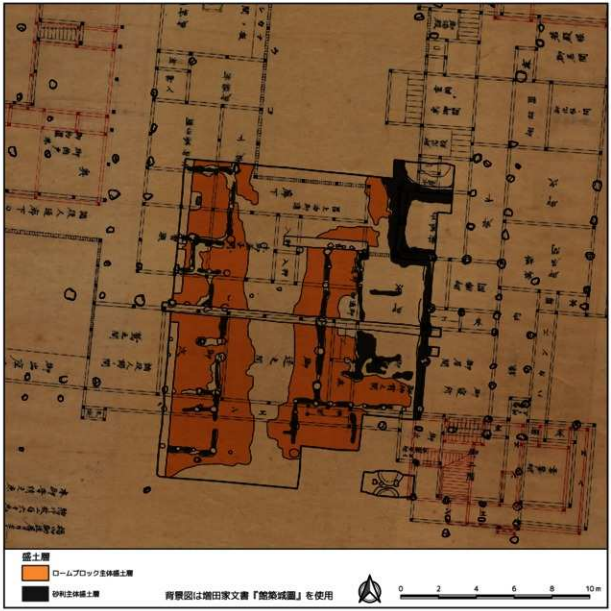


図 5.3　増田家文書『館築城圖』と遺構配置

しかし、東側の建物（建物跡 3）については現地の礎石配置と一致点が多く、「築城圖」の間取りを参考にできる部分が多いと考えられる。西側の建物（建物跡 2）は抜き取られた礎石が多くあると考えられ、築城圖との比較が困難である。今後の発掘調査により西側建物の規模や構造を明らかにし、築城圖との比較検証を行う必要がある。

（宮塚義人・石井淳平）

引用・参考文献

厚沢部町教育委員会 2010『館城跡 VI 平成 21 年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

報告書抄録

ふりがな	しせき　まつまえししろあと　ふくやまじょうあと　たてじょうあと　たてじょうあと
書名	史跡　松前氏城跡　福山城跡　館城跡　館城跡X
副書名	令和５年度歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	10
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	石井淳平・宮塚義人
編集機関	厚沢部町教育委員会
所在地	〒043-1113　北海道檜山郡厚沢部町新町234番1　TEL　0139-64-3318
発行年月日	2024年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たてじょうあと 館城跡	北海道檜山郡 厚沢部町字城 丘158番ほか	1363	C-03-14	41° 52′ 45″	140° 20′ 35″	230602 ～ 230704	217	史跡整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
館城跡	城跡	幕末	礎石建物、布掘状の地業、盛土層、井戸	陶磁器、金属製品	明治元年に築域された館城御殿と思われる2棟の礎石建物の調査である。 旧地表面を厚さ約20cmの盛土層で整地し、その上に布掘状の地業を施している。盛土層や地業の配置から建物が2棟であることが確実となった。 礎石は上下2基が同一地点に設置されているものが確認でき、その性格については解明できなかった。 事前に行ったレーダー探査の反応は地業をよく捉えていることが明らかになった。 陶磁器では、これまでの調査で多く出土していた小型の碗や中型の皿がほとんど出土せず、端反皿、段重がまとまって出土した点に特徴がある。 金属製品のほとんどは鉄釘で、建物の壁や屋根の板材の固定に用いられたと考えられる。

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書　第12集
史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡
館　城　跡　X
―令和５年度歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業に伴う発掘調査報告書―

令和６年（２０２４年）３月３１日
発行　厚沢部町
〒043－1113　北海道檜山郡厚沢部町新町207番地
編集　厚沢部町教育委員会
〒043－1113　北海道檜山郡厚沢部町新町234番地１
TEL（0139）64－3318
FAX（0139）64－3822
印刷　有限会社三和印刷
〒040－0061　北海道函館市海岸町８番11号
TEL（0138）45－0845
FAX（0138）43－3594